

挨拶

# 創作学の創設

## —「先端芸術音楽創作学会」の発足に寄せて—

### ON THE INAUGURATION OF THE JAPANESE SOCIETY FOR SONIC ARTS: FOUNDING A NEW FIELD FOR THE STUDY OF SONIC ARTS

小坂直敏

Naotoshi Osaka

先端芸術音楽創作学会 会長

President, Japanese Society for Sonic Arts

#### 概要

わが国には、これまで、作曲家、およびそれに関わるテーマでの研究者の集いの必要性は認識されていたものの、音楽創作に関する学会は存在しなかった。本稿では、当学会の設立にあたり、設立までの経緯を紹介し、会のミッションとそれを遂行するための運営方針について述べた。通常の学会として当然であっても、わが国の創作者に大きな壁ともなりうる、原著論文の掲載を最高のミッションとすることを掲げ、またそれを支えるための施策を挙げた。さらに、本会独自の作品発表法の考え方、また、情報が偏らないための国際戦略についても述べた。

No organizations concerning the creation of music and related topics are known to exist in Japan, and there has been a need for such an organization. This article first introduces the history behind the founding of such an organization, and then states the organization's mission: to issue original papers. It is a natural mission, though it can be difficult for creators of music. Some strategies to support the organization in achieving its mission are also introduced. We also discuss a new framework for free-of-charge musical performances, which are linked to research presentations. Moreover, a strategy for internationalizing the organization is introduced; such a strategy will allow the organization's members to incorporate well-balanced information from all over the world into their compositions and research.

#### 1. はじめに

このたび新たに先端芸術音楽創作学会が発足し、電子ジャーナルが創刊されることを大変喜ばしく思います。創刊にあたり、これまでの会の経緯を簡単にご紹介し、本会の運営の方針について述べたい、と思います。

近年、工学の分野では、国内外を問わず、さまざまな音楽関連の研究が奨励され、発展してきました。また、この分野への参入者が以前より増え、当初コンピュータ音楽としてくくられていた芸術／工学分野が、アルゴリズム作曲、音響合成、ユーザインターフェースなどさらに細分化されました。

また、マルチメディアアートの一つとして位置づけられるものとなり、視覚芸術とのリンクができたこと、サウンドアートなど、伝統芸術音楽とは別の流れから発展したもの、また、舞台芸術のみならず、サウンドインスタレーションのように、インスタレーションの一部としての発展形など、従来の美術との境界も不明確になってきました。

こうした背景で、国別、あるいは地域対応での新たな音楽関連学会が発足し、これに伴い、音楽研究の成果を発表する機会も確実に増えてきました。

一方、音楽関連の学会活動が活発になってきたにもかかわらず、私は、国際学会に感ずる充足感を国内の研究会であまり感じなくなりました。

その理由は、

1. 研究発表の場に作曲家がほとんどいない、
2. 先端芸術音楽を対象(目的)とした研究があまりなされていない

という点が最も大きいものです。これらは一方が他方

の原因になって、これらが定着する悪循環となっていると考えられます。これらを起こす根源的な理由は研究をする作曲家が少ない、という点です。

一方、コペンハーゲンで開催された ICMC 2007 に参加し、本会の会員でもある若手の研究者あるいは作曲家とも何人か出会いました。そして、国際学会では同好の士が一定数集うにもかかわらず国内ではそのような場がない、という思いを強くしました。

同会議の2ヶ月後に、英国の Kia Ng 氏が私の研究室を訪問した折、この状況を打破しようと、外部講演会を企画したことが会の発足のきっかけになりました。この話を情報処理学会会誌編集委員の白木喜尚氏が聞きつけ、学会を起こすなら、その経緯を情報処理学会誌に紹介したらどうか、と会の広報の場を与えられました。しかし、いきなり学会を立ち上げて軌道に乗せる自信もなく、後ろから押される形で、まず拡大ゼミを考え、私の匂いの残る「音塾」という名称で会を立ち上げ、第2回講演会以降、今日に至るまで継続してきました。この辺の経緯は文献[1]に詳しくあります。

このような経過の後、本年になっていよいよ学会として始動すべき、と考えました。これまで、音塾の活動とは別に、学校主催で Media Project というコンサートシリーズを何回か企画して参りました。これは、本会メンバーも何人か参加してもらい、継続してきたものです。このコンサートと研究発表とをリンクして存続させたい、と考えるようになりました。そのとき、講演会を継続しているだけの任意団体、というのは社会的には非常に弱く、信用も希薄だということに気づきました。研究、あるいは音楽の助成金の申請書類を書くときにも信用のある組織の方が活動を行いやすい、と考えたことがきっかけで、強力なミッションを持たせ、コンサートと音塾とをリンクさせ、名称も再考し、学会として再立ち上げをすることとなりました。以下では、本会をどのように運営していくのか、初期段階での方向性について述べたい、と思います。

## 2. 学会の運営方針

先に述べた研究を行う作曲者が少ない、というのはなぜでしょうか。作曲をする人の多くが、創作は多分に個人的なものであり、研究とはもって非なるものである、とするものの見方に起因するのではないかでしょうか。ただし、これとても、なぜわが国の場合、欧米に比べて研究をする作曲家が少ないかの説明にはなっていません。これは明治期以降、海外から音楽に関する事物を導入したとき、選択的に輸入したのであって、必ずしもすべてを輸入したのではない、と考えるべきか、わが国の教育システムの違いとするなど、ある程度の分析は文献[1]でも行いましたが、決定的な要因はわかりません。

一方、私は創作の中には個人的な部分と客観的な側面があり、この客観的な側面は世に開示する義務がある、と考えています。創作は、われわれが生きていく上で、食料、エネルギー、環境などの第一義的な(物理的な)必要物ではなく、人間としての精神生活を豊かにするもので、文化の創出を担っています。そのため、社会への説明が不十分であっても、特に誰かが困るわけではありません。そして、コミュニティはその担い手がいる限り存続していくでしょう。しかし、その結果、創作の社会性が極度に低くなり、コミュニティ全体が社会から孤立していくように思われます。この考えは、私の専門研究分野が工学分野であるためかもしれません。工学では、全てではありませんが、できるだけ技術情報を開示することが期待されます。

### 2.1. 本会のミッション

では、このような考察から、本会のミッションはどうあるべきか、また、会をどのように運営していくかについて触れたいと思います。

まず、本会のミッションですが、名称通りで、先端芸術音楽を対象とした研究を中心とした学会とする点です。対象はコンピュータ音楽とするか電子音響音楽とするか、運営委員の間で学会名を決める際、長らくその名称が議論になりました。いろいろな背景を鑑みて、先端芸術音楽という名称としました。これまでの研究で自明ですが、先端芸術音楽を対象とする研究は、従来の一分野に特定されず、音楽学、美学、音楽知覚、認知心理学、情報工学、音響工学など既存の学問分野を広範に含みます。そこで、これらを総称して創作学と呼ぼうと考えます。また、個別の研究分野の中で、わが国ではあまり扱われないテーマとして、音楽理論があります。そのほかの多くは、他学会でも扱われる話題かもしれません。そして、その話題自体も歓迎されているのかもしれません。しかし、それは当該学会独自の視点の議論であって、創作の視点での議論とはなりません。そこに作曲家や音楽家がいないからです。

私の例では、純粋工学的な議論の場はいくつかあります、作曲応用としての視点での議論はなされません。研究発表には両方の視点の議論が必要だと考えています。

その意味で本会は、音楽理論は本質的な基礎的な議論の場になるでしょう。他は創作応用、という視点での科学分野になるのではないか、と予測しています。そして、このミッションを掲げることによって創作に関わりのある人々が集まり、互いの情報共有、交換の場となりコミュニティが形成されると期待しています。

また、創作学という分野が、学問分野として、単なる関連分野の集合体ではなく、分野が融合することによる

統一的な、かつ普遍的な視点が誕生するか否かが、将来新たな学問として認知されるかどうかの基準になると思います。

## 2.2. ミッションを遂行するための施策

それでは、このミッションを遂行するための施策を具体的に以下に記します。

1. 原著論文を定期的に発行する。
2. 研究会の定期開催
3. 社会に認知される学会への昇格を目指す
4. 組織としての体をなす団体とする
5. 創作の発表イベントを行う
6. 本会初のイベントのあり方を提案する
7. 日本語を母語としない会員の参加
8. 海外在留邦人の会員の参加
9. 他組織とのコンソーシアムの形成

以下ではこれらについて順に説明します。

## 3. 原著論文の掲載とそのための条件

1. は、ミッションそのものの具体化で、学会である以上最も基本的な会の機能です。しかし、本会では、そもそもこの点から議論になります。すなわち、わが国では研究をする作曲家は多くありません。また、若い作曲家は必ずしも研究を行うようなトレーニングを学校で積みません。しかし、創作には研究と同様に物事を客観的に見つめる工程があり、私は、作曲家は潜在的には研究者たりえる、とみています。一方、多くの作曲家には論文を書く必然性や、論文執筆の機会があまりない、などの事実から、論文執筆を課すことを前面に強く押し出しうると、却って会員増加がみこめない、との意見もあります。

しかし、学会である以上、例え論文本数は少なくとも、また、論文掲載頻度は低くとも、論文を創出することを究極の目標にすることが必然と考えます。そして、原著論文を生むための施策を考える必要があります。それに、具体的な数値目標を掲げ、これを達成する努力が重要と思います。現在、電子ジャーナルは研究会に対応して一冊発行することになりました。年間数回の発行を予定しています。創刊号には原著論文が載りませんが、目標として、2年後までには原著論文を数編含むような雑誌していくよう努力するつもりです。当初は2年に一度原著論文の掲載を目標とし、これが、年刊、季刊、という具合に頻度を上げることを次の目標にしたい、と思います。この条件を満たすために、以下2-4の条件をつけます。

### 3.1. 発表会の開催頻度

2. の開催頻度は非常に重要な問題です。年に一度の総会、という頻度では直接会合の機会が少なすぎ、組織が硬直化し、安定に維持する分には結構ですが、時代に即した会の変容を遂げることは困難かと思います。そのため、本会では、2-3ヶ月に一度程度の開催頻度となるよう、努力する予定です。

### 3.2. 社会に認知された学会

3. は学会という以上、日本学術会議に認知されるような団体に持っていくかなくてはなりません。そのためにいくつかの条件があります。本会にとって、現在最も大きな障壁は会員数です。100名を超える、ということが数ある条件の一つですが、会員数増加について、その方法を少しづつ考えねばなりません。これまででは、会員数を増やすことを目的としておらず、ある分野でのオピニオンリーダーを確保するよう人材を勧誘して参りました。しかし、今後はある一定数確保するための努力も必要です。

### 3.3. 学会の法人化

4. は、必ずしも3. の必要条件ではありません。しかし、任意団体というのは組織としては弱いもので、何らかの法人化を目指したい、と考えています。

以上1.~4.の視点は通常の学会では当然のものでしょう。しかし、本会は研究者のみならず、作曲家を多数含めている集団で、これまで、このような集いがなかった、ということもあり、通常学会の持つ機能を一度に要求しても無理があり、一步一步確認しながら実現していきたい、と考えます。

## 4. 発表会のあり方

5. は作曲家の集団ならではの視点です。ただし、周囲には作曲家の作品発表のための会はいくつか存在し、小さな会を入れたらその数はきりがありません。本会では、作品の発表を主とせず、従とするか、研究発表と併せて、それぞれを発表の両輪として、並列開催を本質的な発表とする研究／創作発表会としての企画を実施する場と捉えています。こうした活動を継続することにより、創作学とは、コンサートが付随してナンボ、という価値観が生まれるかもしれません。

実際に、ICMC (International Computer Music Conference) はこのようないい会としても機能しています。

ただし、本会は発足にあたり、イベントを従としているのは、立ち上げ時の準備状況と、現在、国際的にみて

わが国で欠落している視点を補強したい、という思いが強いからにはなりません。

6. は抽象的な表現ですが、いわば、コンサートの新たなビジネスモデルを考えたい、という点です。コンサートでは、一生懸命チケットを売って、できるだけ多くの会員に聴いていただく、とするのは一般的なコンサート企画者、あるいは出品者の普通の姿勢かと思います。また、助成金申請書類にしても、その予算書の中には収入として必ず入場者収入が当然として記述されています。

一方、研究の成果発表会では、参加料が、通常コンサート程度のものから、1万円を超えるシンポジウムや国際会議もあります。しかし、同時に参加費用が無料であることも、かなり見うけられます。特に競争的研究資金を獲得した場合の発表会は、その発表にかかる諸経費をその資金から出しているため、当然といえば当然ですが、参加費用が無料であることが一般的です。

こうした状況では、研究団体が企画する作品発表イベントは無料の参加イベントというのも考えるべきかと思います。

GNU のような無料でソースも開示するソフトウェアの登場がきっかけとなったフリーソフトの普及、google のように、あらゆるサービスを無料で行い、費用はネット広告費から徴収しようとする方法、などあらたなビジネスモデルがソフトウェア、あるいはネットワークから誕生しました。現在そのビジネスモデルが永久に右肩上がりでないことも示されつつありますが、このビジネスモデルの定着は誰も疑義を唱えません。

作品発表の場を、同時に研究の成果発表とする場にすることができるれば、聴衆が無料で参加できる可能性が広がります。これにより、さらに多くの人が発表会に来やすくなるのではないかでしょうか。

## 5. 国際戦略

本学会は、国際的視野に立脚した学会でなくてはなりません。ここでの国際性とは、ある一地域に偏らないという意味で用いています。7. と 8. は国際的な視点に立脚した上での学展会開をしていきたいのです。基本はわが国の学会です。しかし、国内の邦人だけの会であれば欠落してしまう視点を補うために、外国籍の方々、あるいは海外在留邦人の方々にお知恵を借りたく、また、情報提供をお願いしたいのです。

また、9. は、内外の現存する組織と上手なお付き合いをしたい、と考えます。内外の関連組織と、コンソーシアム、という形で緩やかなリンクが取れれば、と考えています。特に、海外の組織とのクロスリンクを重要視したい、と考えています。現段階では ICMA (International Computer Music Association) の会長の Mara Helmuth 氏と EMSAN (Electroacoustic Music Studies Asia Net-

work) の会長の Mark Battier 氏が会員になっており、なんらかの共通ミッションで協力体制がとれないか、関係を模索していきたい、と思います。

本会は芸術音楽を対象としており、歴史的経緯からはまず欧州の音楽の動向を強く意識することが自然なりゆきです。しかし、欧州に端を発した音楽が広く世界に広まるにつれ、欧州に頼るだけではなく、わが国独自の価値観、米国の音楽文化、あるいはアジア／オセアニアの文化などさまざまなものが関わってきました。個々人はこれら各地域の文化の影響が強いとしても、本会としてはこれらの一地域の文化に偏らないよう配慮したいと思います。幸い、現在メンバー数は少ないながらも、7. と 8. については、この条件を満たしているのではないか、と思います。

## 6. おわりに

以上、先端芸術音楽創作学会の発足にあたり、設立の経緯、ミッションと運営方針を中心に述べました。学会活動、研究活動にはクリティカルマスが必要です。この考えをたたき台として、創作学の内容をさらに吟味し改善し、その考えを啓蒙しながら会を発展させようではありませんか。

## 7. 参考文献

- [1] 小坂直敏. “先端芸術音楽創作の研究コンソーシアム「音塾」の構想”, 情報処理学会誌 Vol.49 No.4, pp. 445-449, 2008.

## 8. 著者プロフィール

### 小坂 直敏

昭 51 早大・理工・電気卒。昭 53 同大大学院修士課程了。同年日本電信電話公社(現 NTT)入社。以来通話品質の研究、音声対話の研究、コンピュータ音楽あるいはマルチメディア創作のための音響研究などに従事。平 6 早大より博士(工学)。平 8-14 コミュニケーション科学基礎研究所音表現およびメディア表現研究グループリーダー、平成 15 東京電機大学・工教授。メディアコンテンツのための音響情報処理の教育と研究に従事。また、音楽制作および発表活動も行う。日本音響学会、電子情報通信学会、情報処理学会、ICMA、IEEE 日本電子音楽協会各会員。現在、東京電機大学未来科学部教授。